殺意の曠野

麗　羅

★大型作家の異色社会派ミステリー★広大な北海道の雪深い原野の隠れ家で美貌の女将が殺された――そのかげには開発にむらがる利欲のウズがうごめいていた

殺意の曠野

毎日新聞社

殺意の曠野

昭和四九年一〇月三〇日　印刷
昭和四九年一一月一〇日　発行

著　者　麗　羅

編集人　桑原隆次郎

発行人　朝居　正彦

発行所　毎日新聞社
〒一〇〇　東京都千代田区一ツ橋
〒五三〇　大阪市北区堂島上
〒八〇二　北九州市小倉北区紺屋町
〒四五〇　名古屋市中村区堀内町

印刷　共同印刷

製本　田中製本

目次

殺意の曠野
雪の章
野の章
ルバング島の幽霊 101
呪譜 161

ブックデザイン　安彦勝博
カバー写真　古屋光雄

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

殺意の曠野

雪の章

1

午後十一時十分になって、テレビは、やっとローカルニュースに続いて天気予報を放送した。最初に札幌・小樽地方、次に空知地方の方を、三番目になって、

「胆振・日高地方は、今日の夕方前から降り続いている雪も今夜半には止み、明日は全般的に快晴の見込みです。海上は波が無く、穏やかでしょう」

といった。

藤耕一は、聞きたいと思っていた——その胆振・日高地方の分が済んだので、スイッチを切って窓の方に視線を向けた。

夜半には止む——とのテレビの放送に合わせたように、雪はたしかに止んでいた。

藤は椅子から身を起すと、室の電灯を消して窓際に歩み寄った。そして、アルミサッシュの窓を、いっぱいに開け放った。

視界が急に開けて、白く静かな市街地の夜景が鮮明に浮んでくるのと同時に、冷たくて寒い外気がさーっと室内に流れ込んできた。その冷気が瞬間的には快かった。藤は、それまでのかなり長い時間を、きき

過ぎる程の暖房の中で洋服も靴も脱がないでいたので、肌がじっとりと汗ばんでいる程だった。

雪明かりの中で俯瞰する街の夜景は、妙に寒々として色褪せた感じだった。街灯や広告灯の輝きも弱々しい。立っている場所がさして高くないせいか、あまり遠くの方も見えない。

藤は、今度は上半身を窓の外に乗り出すようにして、空を仰いだ。空をいっぱいに覆っていた筈の厚い雲か何個所も引き裂かれて、小暗い深淵のような空間が急激に拡がってゆく。そして拭われてゆく雲の向う側から、幾つもの星が淡い輝きを取り戻している。

そのうちに藤は、身ぶるいしたくなるような寒さを感じた。そして、しばれる——というこの地方独特の寒さの形容詞を思い出して、急いで窓を閉めた。

腕時計を見ると、十一時二十五分になっていた。

〈——とうやら、今夜は連絡が無いらしい。おれは一人合点をして、無駄な時間を待っていたようだ〉

藤はまた部屋の電灯を点けると、腕時計を外してベッドわきのサイドテーブルの上に置いた。

何らかの連絡があるかもしれない。そして、その連絡の内容によっては、雪の中でも直くに出かけることになるかもしれない——そんな予感がして、外出もせずに、コートだけは脱いていたが洋服も靴も着けたままでいたのだった。彼は、はぐらかされたようで、何となく拍子抜けのような気分になった。

午後二時五十分に苫小牧に到着する下り特急の〝おおぞら三号〟から降りて、藤がこの十勝ホテルに入ったのが午後三時丁度だった。

それからは一度もホテルを離れず、夕食もホテルの一階にあるグリルで済ました。だから八時間以上も待機していたことになる。

先方は、苫小牧に着いたらホテルで待機していてくれ——とは言っていない。しかし、昨日——十二月

二十三日の午後九時四十分に上野を発車する下り特急寝台列車の〝ゆうづる三号〟から、青森でそれに乗り継ぐ青函連絡船の〝八甲田丸〟と、さらに函館から接続する〝おおぞら三号〟へ、東京から苫小牧までの鉄道便を指定し、苫小牧に間違いなく午後二時五十分に到着して欲しい――と言ってきたことから、藤は、今日の夕方か夜にも、相手方から何かの連絡か、接触かあるものと期待したのだった。

〈こんなことだったら、遊びにでも行くんだった。今日はクリスマスのイブなのに……〉

軽く舌打ちをすると、藤は服を脱ぎ始めた。

もう盛り場もおしまいになる時刻である。風呂にでも入って寝る他はない。

ベッドの足もとの方に備え付けのロッカーがあったが、脱いだ服や下着をベッドの上に乱雑に散らかしたまま、藤は冷えた体を浴室に運んだ。

東京・世田谷の中級アパートに独りで住んでいる藤のもとへ、その電話がかかってきたのは、五日前――十八日の深夜だった。ある友人が小さなスナックを開店して、その開店祝いで遅く帰宅した藤が、ベッドに入ろうとした時に電話のベルが鳴った。

パジャマの上からガウン代りにオーバーをひっかけて受話器をとると、

「債務整理を、専門にしていらっしゃる、藤耕一先生ですか?」

低い、中年の女の声が聞えてきた。

一介の事件屋にすぎない自分を先生と呼ばれて、藤はこそばゆさを感じたが、

「そうですが……。わたしが藤ですが……」

と繰り返して返事をした。すると電話の声は

「わたくし、神楽坂で植松という料亭をやっている植松千枝と申します」
といった。
藤は、あっと軽く叫び声をあげて、直ぐに、電話に直結してあるテープレコーダーの録音キイを押した。
神楽坂の料亭〝植松〟が倒産して、経営者の植松千枝が行方を晦まし、彼女に金を貸した債権者（その大部分が高利貸しだが）たちが血眼になって探しまわっていることを、藤は聞いていた。債務整理の事件屋である藤が相手にするのは殆どが高利貸しなので、その業界の情報をキャッチするのは早いし、関心も持っている。料亭〝植松〟倒産の情報も、二週間ぐらい前に耳にしていた。藤は、重要な要件や、事件依頼の電話は、必ず録音することにしていた。藤の方では植松千枝の噂を耳にしていても、植松千枝の方では藤のことを知らぬ筈である。その彼女から突然に、しかもこの深夜に電話がかかってきたということは、仕事の依頼以外には考えられないのである。
植松千枝の電話の声は、低い調子のまま、句節と句節の間を短く区切って聞えた。
「実は、藤先生が、債務の整理に関しましては、そこらの弁護士さんたちよりも、ずーっと上手だと聞きましたので、わたくしの方の件も、お願いしたいと思いまして、お電話しているのでございますが……」
「弁護士さんたちより上手か下手かは別として、たしかにわたしは債務整理を引き受けることを商売にしているものですが……」
「お願いできるでしょうか？」
植松千枝の声には、縋りつくような感じがあった。
「そりゃ、依頼されれは断わることは致しません。しかし、わたしが整理を引き受ける借金の相手は、町の高利貸しだけで、また、借金の総額に対して、ある程度の返済資金を準備することと、高利貸したちに

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

債権の減額を呑ませるために、わたしの指示する通りの処置を講じること、これらの条件を承知してもらわねばなりませんが……」
「結構てございますとも……。先生に、お縋りするからには、何でも、先生の、お指図の通りに、するつもりでございます」
「依頼を引き受けるとすると、どうしても直接にお会いして、色々と事情を聞いたり、事前の処置を相談しなければなりませんが……。植松さんは現在、どちらにいらっしゃるのですか？」
「北海道の苫小牧でございます」
「北海道！」
藤は少し声を高くした。ずい分と遠くへ身を匿したものだ、と思った。
「実は、わたくしの故郷が北海道でございますから……」
「成る程、それで……」
「はい。それでも、金貸しの社員たちが、わたくしが北海道出身なのを突きとめまして、何人もこちらへやって来て、わたくしの親戚すじの家へ、押しかけてきているのでございます」
当然考えられることだった。債務整理の事件屋になる前は金融業の社員だった藤も、当時は、逃亡した債務者の行方を追って、その出身地や親類・知人の家へ何度も押しかけていった記憶があった。
「それで、奴らにあなたの隠れ家を知られはしないでしょうね？」
「はい。親戚たちには、固く口止めしてありますし、わたくしも、できるだけ家を、一歩も出ないようにしていますので……」
「それはよかった。今後とも、気をつけて下さいよ」

「はい。それで、藤先生には、ご足労でございますが、この苫小牧まで、お出でになって頂きたいのでございますが……」
「結構ですよ、そちらへおうかがいしますから、住所と電話番号を教えて下さい」
と、気軽に言った。だが、植松千枝の電話の声は、住所をいわなかった。
「二十三日午後九時四十分に上野始発で、二十四日の朝の七時五分に青森到着の特急寝台の〝ゆうづる三号〟と、それに接続する——青森を七時半に出航して函館に十一時二十分に着く連絡船の〝八甲田丸〟、さらに、函館を、その二十分後の十一時四十分に発車して午後二時五十分に苫小牧に着く、特急の〝おおぞら三号〟と、この指定の特急券や、乗車券、グリーン券などを、明日速達で先生の住所へお送りしますから、それてお出でになって、苫小牧の駅の南、五、六分のところにある、十勝ホテルにお泊りになって下さいませんか……。先生のお名前で、二日間宿泊の予約をしておきます。そして、二十五日の朝十時に、わたくしの方で、ホテルにおうかがい致しますが……」
と、苫小牧への道すしを指定してきた。
〈この人は、債務整理を委任しようとする——おれに対しても用心して住所を言わないのか！〉
藤は、かすかに苦笑した。その用心深さは理解できた。しかし、二十五日の朝十時に苫小牧で会うのに、二十三日の夜から、延々十八時間もかかる鉄道便を利用し、しかもホテルで一泊するような無駄なことをする必要はない、と思った。

2

「二十五日の朝十時に、その十勝ホテルでお会いするのはいいですが、それなら、何もそんなに時間がか

かる列車を利用したり、前日にいって泊らなくとも、二十五日の朝羽田を出る飛行機の第一便か、二便を利用して千歳までゆき、千歳からタクシーを利用すればこの方が経費的にも時間的にもずーっと得じゃないんですかね？」

と藤か提案したが、

「いいえ。ご面倒でも、先生には、ぜひとも列車便を利用して、二十四日の午後三時までには、十勝ホテルに入っていて、頂きたいのでございます」

植松千枝は、あくまで、自分の指定したコースで来てくれ、と言う。

「航空便を利用してはいけない——何かの理由があるのですか？」

この質問に、植松千枝は考えこんだらしく、少し時間をおいてから、

「実は、二十四日の夜に、わたくしを援助して下さる方から、どれだけの金を、何日に出して下さるか——というはっきりした、ご返事があるのでございます。わたくしは、そのご返事を聞くときは、今後のことを、面倒をみて下さる、藤先生に、同じ苦小牧に、どうしても、いて頂きたいのでございます。それから……」

と、また少し、時間をおいて、

「飛行機というものは、風が少し強かったり、空模様が悪くなるだけで、時間をずらしたり、欠航することが、多うございます。時間は沢山かかっても、汽車の方が安全で、正確でございます」

言葉を短い句節ずつに区切って、相変らずの低い調子でいった。

藤に、強いて航空便の方を固執する理由はなかった。

「判りました。では、その、送られてきた列車便の指定券のとおりに行きましょう」

と返事をした。
「ありがとうございます。それから、詳しいことは、二十五日の朝に、お会いしたときに、決めることにしまして、とりあえずの費用として、三十万円だけを、お送り致したいと存じますが、銀行送金致しますから、先生の取り引き銀行と、口座名を、お教え下さいませんか？」
「銀行はM銀行の世田谷支店で、藤耕一という普通預金の口座ですが、何も、無理してすぐに金を送らんでもいいですよ」
「ええ、でも、お金を、送っておかないと、先生が、わたくしの味方になって下さった、という気がしませんから……。明朝一番で、M銀行の、苦小牧支店から、同行送金致しますから、明日のお昼ごろには、先生の口座へ、振り込まれていると思いますが……」
「判りました。どうぞ、お気が済むようにして下さい」
「はい。では、先生、くれぐれも宜しくお願い致します」
その言葉が終って電話が切れた。

電話が切れてから、藤は、一番大事なことを訊くのを忘れていたことに気がついた。それは、植松千枝が、どういう経緯で藤自身のことを知ったか――ということだった。藤は、東京の金融業者（特に高利貸し）仲間ではいくらか知られてはいるが、社会的には全く無名の存在である。神楽坂の料亭の〝植松〟を利用したことも、勿論無い。
〈植松千枝は、誰から、おれのことを聞いたのだろうか？〉
それと同時に、やはり、二十三日の午後九時四十分に上野を出発して、二十四日の午後二時五十分に苫

小牧に到着する鉄道便を指定してきたことも気になった。植松千枝が電話で言った二つの理由も、理解できないわけではないが、何となく、別の理由があるような気がしてならないのだ。

〈二十五日の朝十時に会う約束をしておきながら、何でおれを、その前日の午後三時に現地に来るようにするのか？　これは何かの罠か？〉

とも疑ってみた。

しかし、何の利害関係もない、そして全く未知の人間である植松千枝が、自分に対して、三十余万円（銀行送金される金と鉄道の切符代）もの金を使ってまで、罠を仕組むべき理由など、あろう筈もない。

〈電話の話しぶりでは、植松千枝が行方を晦ましたのは、単なる逃避ではなくて、借金返済のための金策のようだ。北海道出身の彼女には、故郷に、援助してくれる――誰かのあてがあったのだろう。そして、交渉の結果、ある程度のめどがついたのだ。しかし、その金額は、借金の全額よりは足りないらしい、それで、誰から聞いたか知らないが、事件屋のおれの名前を思い出して電話してきたのだ。彼女に金を出して援助する人物にすれば、出した金で彼女が完全に救われる保証が必要なわけで、最終的返事をする筈の二十四日の夜には、あるいは、彼女からの連絡で、債務整理を引き受けるおれが、その金を出してくれる人物と会うことになるかもしれない〉

――こう考えれば、二十四日の午後三時には苫小牧の十勝ホテルに入ってくれ――と言ってきた先方の提案も納得できる。

〈すべては、先方が電話での約束通りに、金と切符を送ってきてからだ……〉

思考を止めると藤はそのままベッドに入った。

金はたしかに翌二十日の昼ごろに、振り込まれてきた。列車や連絡船の切符も、二十一日の午前中に、北海道苫小牧市表町・十勝ホテル内植松千枝の差し出しで、速達で配達されてきた。切符は全部苫小牧駅で発売されたものであり、速達の消し印も苫小牧郵便局になっていた。

速達を貰ってから出発までの丸二日間、藤は植松千枝関係の資料や情報を蒐集した。詳しい話は、二十五日に本人の口から直接聞けるにしても、自分なりに、新しい仕事のアウトライン位は摑んでおきたかったからだ。

新宿区役所の出張所からとった住民票で、植松千枝が昭和九年一月十八日生れの三十八歳で、本籍が、北海道胆振支庁勇払郡厚真町清住、父親が植松勇吉、母親が植松アイ――ということが判った。父親母親とも故人になっている。しかし、兄弟関係は判らない。住民票をみたかぎりでは、彼女は独身であり、子供も居ないようである。

植松千枝は、昭和三十七年の十二月から新宿区神楽坂の料亭〝植松〟の住所へ転入しており、その前は、台東区根津に住んでいた。

藤は、東京法務局の新宿出張所にいって、料亭〝植松〟の土地・建物の登記簿謄本を取った。土地が約百坪、建物が一、二階合計で百十坪――両方とも、昭和三十七年の十一月付けで、植松千枝が買い取ったことになっていた。

昭和三十七年というと、植松千枝が二十九歳である。料亭〝植松〟は、当時でも三、四千万はした筈だ。二十九歳の若い女が、三、四千万もの高い買い物をしたことになる。考えられるのは

〈植松千枝には、金持ちのパトロンがいた〉

ということである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com